

白衣を脱いだ竹内たけうちの手がコンピュータの端末の上を忙しく動くのを、葉山はやまはじっと見つめていた。

向かいあつてすわる葉山の目からは、モニターのスクリーンが斜めに見える。画面がゆっくりとかわると、葉山のデータが浮かびあがった。きのうの午後からの丸一日のあいだに、葉山の血液、尿、心電図、レントゲン写真、その他から計測されたさまざまな数値がびっしりと並んでいる。

人間ドックとしては途方もない高額料金をとる「タケウチクリニック」だが、それだけに、二十四時間以内ですべての検査結果がそろろう。

「前回とあまりかわらんですな」

竹内は、葉山にも見えるようにモニターをずらし、いった。

「ちょっと血圧が高いくらいで、あとは問題ありませんよ」

ゴルフのハンディは、確かこの前の月例で優勝し、「8」になった筈だ。それを証明するように、みごとに左の手首から先だけが白い。あとはまっ黒に焼けている。

「朝ときどき、声がかかれていたりするんだ。そんなに前の晩、大声をだした覚えもないのだが」

葉山はいった。

竹内は丸っこい顔は無表情に傾けた。

「熱いものや冷たいものを飲んだとき、喉がしみますか」

「いや。それはない」

「じゃ、大丈夫だ。煙草は？」

「吸ってるよ、今も。一日二十本くらいだ」

「葉山さんのお年なら、酒も煙草も、好きだけおやりになってかまわんでしょう。今のところ、肺も肝臓もちゃんと生きている」

「くたびれてはいるが、か？」

葉山はにやりと笑ってみせた。竹内は大まじめに頷いた。

「これから癌にかかったとしても、進行はゆっくりです。寿命とたいしてかわらない」

「ひどいことをいうじゃないか」

「百歳まで生きたいですか？ それならいろいろと考えなければならぬ」

「やめとこう」

葉山は首をふった。初めて竹内が笑った。

「そう、ほどほどがいいですよ。あと二十年、どうです？」

「長すぎるな」

葉山はしかめつらをした。

「それならどうしてうちにくるんです？ あと五年か十年でかまやしないなら、半年に一度の人間ドックは必要ない」

竹内は笑いを消さずにいった。十五歳下のこの医師とは、もう八年のつきあいだった。半年に一度の人間ドック以外にも、メンバーになっているゴルフコースで、月に二度は顔をあわせる。

口の悪いところは、グリーン上で会ってもいっしょだ。

「趣味みたいなものだ。ゴルフでふんだくってるぶん、儲けさせてやろうと思ってる」

葉山はいって笑った。竹内は口を尖らせた。

「そりやそうだ。葉山さんにハーフ五枚は、盗っ人に追い銭だって、皆んないますよ」

「適正ハンディさ」

「よくいますよ。そんなのじゃなくて、まだ小さな隠し子がいるんじゃないですか」

葉山はゆっくりと首をふった。

「残念ながらそつちのほうはそろそろ終いだ」

「本当かな。いつてます？ 銀座」

竹内は小刻みにすわっている回転椅子を動かしながら訊ねた。

「ときどきだ。近頃は眠くなる」

竹内は息を吐き、育もたれによりかかった。首をふり、いう。

「怪しいもんだな。葉山さんはけっこう若い子にも人気があるからな。紳士だなんて思われてるし。正体が追いつきだってことは、せつせと女の子たちに話してやるんだが信じようとしない」

喜ばせようといっていることは明らかだった。葉山は微笑んで答えた。

「年の功さ。先生も六十を過ぎれば身につくテクニクだ」

「だとしても、ですよ。葉山さんの言葉を信じるなら、そのときはもう遅い」

「個人差がある。先生も医者なら、鍛えて、それから、あまり無駄撃ちをしないことだ」

「やれやれ。とにかく、検査の結果は異状なしです。ハンディをひとつ減らしてもいいくらいね」

「ありがとう。半年たったらまた会おう」

「その前に、『シニア選手権』、でるんでしょ」

「つもりは、つもりだ」

「もんであげますよ。予選前に」

竹内はいって、モニターのスイッチを切った。立ちあがり、白衣を手にした。

「これから大学ですか？」

「いや。きのうから休暇をとったのでね」

「いいなあ」

本気でうらやましがっている口調だった。

「大学教授てのは、本当に優雅な商売だ」

いっしょに歩きだし、葉山のために「院長室」の扉を開けてやりながらいった。

「私の授業が生徒に人気がないだけさ」

「それならどうして学部長になんてなれたんです？」

病院の廊下にでた葉山は立ちどまり、竹内の顔を見なおした。

「年の功さ」

一瞬、緊張した表情になった竹内はそれを聞いて天井を見あげた。

「タケウチクリニツク」は、乃木坂のぎざかにあった。竹内の愛人でもある、若く美しい受付嬢に見おくられ、葉山はタクシーに乗りこんだ。

「白金台にいつて下さい」

腕時計をのぞき、いった。かすかだが頭痛がしていた。昨夜は病院のベッドで寝たせいで、午前三時に目覚め、それから眠れなかった。そのせいだろう、と葉山は思った。時刻は十一時二十分だった。朝食にはほとんど手をつけなかったが空腹感はない。薫かおるは起きているだろうか。

たぶんまだ眠っている。もし起きていたら、何かをいっしょに食べにでもかけてもいいのだが。

白金六丁目の交差点を左折し、白金台にでる手前を国立自然教育園の方角に右折する。ソマリア大使館に近い、年代物のマンションが葉山の住居だった。

マンションそのものは築後二十年たっている。葉山が中古で部屋を買い入居したのは、今から五年前、妻の恵美えみを亡くしてから一年後だった。古いが建築当時としては最高級の造りを誇った建物だけに、幅広でどっしりとしている。一階のエントランスをはさむように広い駐車場があった。戸数ぶんの駐車スペースがあるという、今どきではまず不可能な敷地面積をもっていた。

タクシーを降りたつ動作が、頭痛を強めた。こめかみをもみたいのをこらえながら、ロビーを抜け、奥に二基あるエレベーターのひとつに乗りこんだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。